1960 年代後半から 1970 年代における建築思想としてのデザイン・サーヴェイ
–「戦後」の言説と取り組みの系譜に着目して–

建築史・建築論研究室　弓削多宏貴

序章

0-1　研究背景

デザイン・サーヴェイ（以下 DS）は、1960 年代後半から 1970 年代にかけて取り組まれた都市・集落調査として知られる。近年その一連の動向が再評価され、図面表現の分析や調査方法の評価を通してそこに共通して見られる具体的な空間分析と多様な問題意識や関心の広がりが明らかにされている。

筆者はこうした DS の性格を歴史的文脈の中で捉えたい。DS は、(1) 戦前派／戦中派のマルキスト／リベラリストの戦後的な対立の中で思想的基盤を築いてきた人々（篠原一男、神代雄一郎など）と、(2) そうした構図そのものに実感を持たない戦後生まれ世代の人々（元倉真琴、真壁智治など）によって取り組まれ、DS に見られる「建築家の理論と実践」の「一般民衆」への接続といった戦後民主主義の思想史的課題が彼らの間にある「対立」や「断層」として歴史的に現れたのだと理解できると考えるからである。

しかし DS の再評価は、(i) この運動の経緯や主体の整理、(ii) 都市や日常のリアリティに向かう意識の発露としての評価、(iii) 近代主義批判や資本・官僚制に対する異議申し立ての一部としての抽象的な位置づけ、(iv) 調査から実践的方法への接続の困難さの指摘にとどまっている。それらは、(a) 現代の視点から理解しやすい像を強調するのみで、逆に戦後の歴史過程の脈絡において DS を見ていない、(b) 建築の近代主義／反近代主義という見方に閉じており、より広い「戦後」の独特の思想史的な磁場とその展開が視野に入っていない、ことによると筆者は考える。

前述した (1) の対立を小熊英二の言説整理を踏まえて筆者なりに図式化すると、図 1 のように整理される。一方で (2) の世代は、否定し難い社会経済の全体を彼岸に置いて私的な実践と思想のための足がかりを求めようとするものであった。

本研究では、こうした仮説的なパースペクティブから、DS の戦後思想史的な意義を考えるための基礎作業を意図している。

0-2　研究目的

1.　戦後思想の一部としてデザイン・サーヴェイを位置付ける。

2.　デザイン・サーヴェイの特徴的な傾向性を明らかにし、調査主体がそれぞれいかに「戦後」と接続しようとしたかを考察する。

3.　戦後思想の足がかりを踏まえて特徴的なデザイン・サーヴェイ主体にある思想的制約を考察し、その間に見られる思想の差の比較・検証を試みる。

0-3　研究方法

本論では、調査主体がその取り組みの直前に、戦前からの「近代」と「日本的なもの」の接続に向けた運動を批判的に捉え、戦後日本における新たなナショナリズムの達成と建築の民衆的基盤を獲得するための建築理論の立ち上げを課題とした 1950 年代の「民衆論・伝統論争」をさらに批判的に乗り越えようとした言説を残していること、さらにその後の建築家の「主体的な取り組みの問題」と「都市（対象）の問題」が再度合流したところにデザイン・サーヴェイがあったことに着目し、戦後からの一連の取り組みを戦後民主主義の建築的解釈として位置付ける。

さらに対象とした 1965–70 年代のフィールドワークを、筆者の可能な限り検証し、デザイン・サーヴェイの特徴的な傾向の記述と、その問題・目的意識の「戦後」的解釈を試みる。

以上を踏まえ特徴的な主体に見られる社会的背景を整理し、思想的な差の抽出とその関係性の記述を試みる。

第１章　日本における「戦後思想」の社会的考察

小熊英二の言説を引用し、戦後の言説が、1955 年以前の、貧困と改革の時代としての「第一の戦後」と、それ以後の高度経済成長期の安定した社会秩序を確立した時代としての「第二の戦後」との間で大きく転換するとして、本論でもこれを軸に戦後建築論を検証する。

1-1　第一の戦後（1945 年 -1950 年）

1-1-1　民主化運動の統一

戦後直後、激しいインフレと貧困が続く中、労働組合が民主化運動を起こし、1947 年には日本共産党の後ろ盾の下に、二 . 一ゼネストが起こる。同時期に、建築界では民主化に向けた小グループの結成と、その運動の統一としての NAU の結成があった。NAU の労働組合の設計事例の多さ、綱領が「新日本文学」の綱領と酷似していることから、左翼的動向と建築界の動向は並行関係にあり、左翼的なイデオロギーが NAU の活動の思想的基盤にも影響したことが推察される。

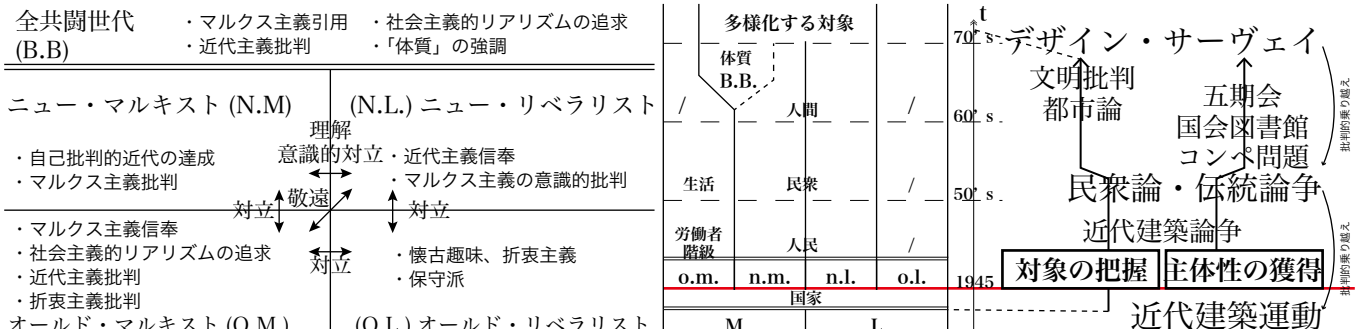

図１：本論の構造と知識人の４つの性格による対象の把握

1-1-2 「近代」の再評価

若い世代の知識人は、戦前からの近代批判を見直し、その再評価を行う。浜口隆一の『ヒューマニズムの建築』(1947 年 12 月雄鶏社）に図師嘉彦が反論を示した「近代建築論争」では「日本の近代建築をどう規定するか」を争った。浜口は機能主義的に具体的な空間を捉え、舊い建築にある封建性を打倒することで、「人民」のための空間を獲得できると主張する。図師の批評は、濱口のいう「人民」は「ブルジョアジー」を指すとして、教条的マルキスト的な性格の批判であった。

1-2　第二の戦後への移行期（1951 年 -1960 年）

1-2-1　左翼イデオロギーの変化と伝統の強調

50 年代初頭に、冷戦激化を背景とする社会主義革命が起こる。アメリカの占領政策は、日本を反共の防波堤と規定し保守化し、共産党員の公職追放などを行う。ソ連からは日本共産党を批判する「コミンフォルム批判」がなされ、これにより共産党は平和革命路線から対米民族独立を掲げ、過激な民族主義を主張するようになる。この時期に米国基準に日本を合わせるようなジャポニカ･スタイル(新日本調）への批判が現れる。これらを背景に、J・レーヴァイ 針生一郎訳「建築の伝統と近代主義」(『美術批評』1953 年 10 月）を契機とした、民衆論・伝統論争が起こる。丹下健三が寝殿造や桂離宮の広やかな空間と比例に国民的建築の典型を見出した近代主義的立場と､民家の土間や小屋組に力強い民衆的エネルギーとしての｢縄文的なもの」を捉えた白井晟一のニュー・マルキスト的立場の対立として民主的空間の表現が争われる一方で、民衆を表現するのは建築家自身とした丹下健三の主張や、マルクス主義へ共感を寄せる西山夘三は形としての伝統の追求のみでは民衆的でないとし、国民の生活と結びつくことを主張など建築家の「主体性」が争われた。

1-2-2　若い世代の主体性論

1955 年の六全協における軌道修正など、社会的立場を失墜させていく共産党の活動に煮え切らない若者らが中心となって、1958 年に全学連が結成される。1953 年末から 54 年にかけて建築界では、国立国会図書館コンペの応募要項に対し質疑書が提出され、建築家によるボイコット運動が起きている。建築家は設計案の提出以外、その採用を含め介入が許されないといった建築家の職能に関わる問題であった。コンペ要綱に携わった審査員の建築家の無自覚さ、コンペ当局の妥協案を許した大学教授クラスの建築家に煮え切らない思いを抱いた、設計事務所や研究室で設計労働を担う当時三〇代前後だった若者は、建築家の主体性の確立を目指し、1956 年に「五期会」を結成する。「ワンマン・コントロール」打破を唱い、共同設計を行うなど、設計体制の民主化を目指し、設計労働を担う人間が主体的に創造の自由を獲得できる社会の実現を目指した。

1-3　第二の戦後（1961 年- 1970 年）

1-3-1　人間の手を離れた文明批判

高度成長と輸入自由化が起こり、安定と平和の大衆ナショナリズムが広がり、東京オリンピックなどの大規模な公共事業が行われるなか、大学のマス化によって孤立感や未来への不安を覚える学生たちを中心に体制批判がなされる。この時期の公害問題に代表されるように都市環境や建築環境の工業化による汚染が指摘され、近代主義・機械文明批判が展開される。人間の手を離れて都市が巨大化していくことや、それまで日本の近代化を進行させた機能主義的思想が、具体的な人間の環境を捉えきれていないことが指摘される。

1-3-2　伝統論争の反省

現実に現れた都市環境の混乱が深刻化し、現状を打破するための理論の確立が急がれ、こうした現状を引き起こした建築家のあり方や戦後の論争の結末が批判的に問われるようになる。都市を埋め尽くす住宅デザインの不統一と質の低さは、1950 年代に争われた建築における伝統的なデザインや具体的な民衆のための空間に関する議論が不十分であったことに起因する、民衆論・伝統論争の批判がみられるようになる。

第２章　デザイン・サーヴェイの傾向分析

2-1　デザイン・サーヴェイに向けた言説と評論分析

2-1-1　DS 萌芽直後の評価

調査主体各々の取り組みに対する期待やスタンスを示す言説が残される。伊藤ていじは変化する都市形態の崩壊の現状を把握できるものとし、その中に新たな環境デザインのきっかけを見ることができることを述べている。

2-1-2　DS 中間期における評価

70 年初頭には、それまでの作業に対しての振り返りがなされる。宮脇檀はそれまでの DS の動きを、出発点、批判としての動きとして大きく規定しながら、その効用として、創る側の作業と住み手側の関係性を強調する。

2-1-3　DS 個体に対する評価

調査とデザインを架橋する術が見出されぬ中、自身の作業を意識的なものとして示すため、その意義と批判的スタンスが表明される。真壁智治は、それまでの DS とは意識的に分離していたと主張し、一種の都市的パフォーマンスとして作業に取り組み、街中のアスファルトの表面をフロッタージュした。

2-1-4　現代における DS の評価

DS が沈静化し、徐々にその言葉が失われていく 1990 年代後半以降に、その大まかな概略と回顧録が取り組まれる。ここでは、近代の見直し、景観論・保存論やコミュニティ論の台頭、磯崎新・伊藤ていじらによる『日本の都市空間』(彰国社 1968 年 3 月）が、DS の理論的基盤を補完したこと、社会が生み出す自律的な関係や構造への関心が高まったことなどが指摘され、実測の成果と創る理論の間に立脚点が見出せないまま沈静化していったという評価が一般的になされている。

2-2　デザイン・サーヴェイの特徴的傾向の抽出

前章を踏まえて、1960 年代後半から 1970 年代に取り組まれたフィールドワークを、建築専門雑誌、学術論文、及び書籍から筆者の可能な限り検証し、その調査主体の関係性と DS の特徴的な傾向として抽出したものを図２に示す。

ここで分類した３つの特徴的傾向はそれぞれ以下のように解釈できる。神代雄一郎、吉阪隆正、宮脇檀、篠原一男による取り組みに見られる、ある領域が作る共同体意識の捉え方とその生態的分析と形態とそれの持つ意義の探求を特徴とする【近代主義的 DS】は、「具体的な大衆空間の把握」と「近代の影響の分析と共同体の連帯意識の構築」、「大衆的空間の機能主義的な分析」と捉えられる。上田篤や島村昇をはじめとする UDO グループによる、「生活」に立脚した開発のあり方を目指す【社会主義的 DS】は、「生活空間の

具体的な把握」と「開発理論における主体性の確立」と捉えられる。元倉真琴らコンペイトウグループや、真壁智治ら遺留品研究所による確かなものとして実感できる物的なものが持つメッセージの分析やその生成理論を探求する【身体的都市記述行為】は「主体的に公共（都市）へ参加するための足がかりの確立」と捉えられる。

第３章　近代主義的デザイン・サーヴェイ

このサーヴェイに見られる傾向としてあげられるのは、「近代」の危険性の理解とその共存の模索、機能主義的空間評価、計画学の可能性への信頼、形態・構成の意識的分析、統一への意思である。

3-1　神代雄一郎

神代は NAU での活動において、「日本建築運動史講座」の準備を行なうなど、戦後直後から戦前の「近代」と「日本的なもの」の接続をめぐる議論に参加した。商業主義的なジャポニカスタイルの流行に、戦前からの折衷主義的傾向の改善が見られない建築家への失望を抱きながら、自身は「日本的なもの」への探求に向う。地方の観光ブームにおける建築デザインの粗雑さや小住宅の氾濫に対し、地方での建築家のあり方や人間のための空間を見直しながら、50 年代の伝統論争の批判的な再評価を強調する。アメリカ留学の中で、原因不明の大停電などの経験から、近代文明に依った社会の危険性を自覚し、さらにコミュニティを前提に成立されたアメリカ社会に一つの理想的な社会のモデルを見る。DS では、地方集落における近代の受け止め方やコミュニティの空間的構造の関係性を探る。

3-2　吉阪隆正

吉阪は敗戦直後、女性が住宅に求める機能について研究し、住宅の機能主義的評価に取り組む。1950 年から２年間勤務したル・コルビュジエのアトリエでは、コルビュジエが日本の中に近代をどう接続するか期待するという点に注目している。国立国会図書館コンペ問題の中では、コンペ当局に質疑書を送り、建築家の職能の確立に向けた運動の先頭に立った。都市における文明批判が起こる中、その建築的解決に向かう。都市を物的現象として位置づけ、人間の空間領域の認知に限界があることに注目し、独立した個人を前提としながら都市における共同的空間を確保する、不連続な統一体の形成を目指す。DS では都市空間における領域論を主題に捉える。

3-3　篠原一男

篠原は、海外からの日本建築の高評価を客観的に捉え、真に日本的な建築の性格を探求する。その一連の日本建築の再評価は、西欧に対する日本の特殊性とその内面にある文化の社会的制約といった限界性を前提とした上で一貫して 50 年代の伝統論争の中で立ち上がる「貴族的なもの」と「庶民的なもの」の問題提起を足がかりに、その造形にある本質を探ろうとするものであった。DS では、内部空間の面積、住居と道の結びつきを問題とした民家研究と、中世都市における屋敷と道の結びつき、都市の構成を問題とした城下町研究といった都市と住居の日本的本質への探求に向かう。

3-4 宮脇檀

宮脇は、取り組みを開始する前に、都市の混乱を問題視し、その統一的景観の確立を目指していた。統一的景観像を生み出した時間的・空間的な多様性の分析を通して、飛騨高山における城下町としての特性をみるものと、高山特有の条件の中で生み出されてきたものを分析している。DS では、統一的な景観を持つ集落を対象とし、その美観の原理の模索として、視覚的分析、それらを構成する物的エレメントの分析、シークエンスに見る都市の現れの分析を行う。

第４章　社会主義的デザイン・サーヴェイ

このサーヴェイに見られるのは、国民の生活への意識、保存に向けた取り組み、地方文化と経済の自立に向けた取り組み、民俗学の物質文化の影響である。

4-1　上田篤

上田は、それまであった抽象的な「空間」概念に対し、生活空間を対象として捉える。それまでの都市空間がそうした抽象的なものであったことを指摘し、時間の中で目まぐるしく変化する生活様式

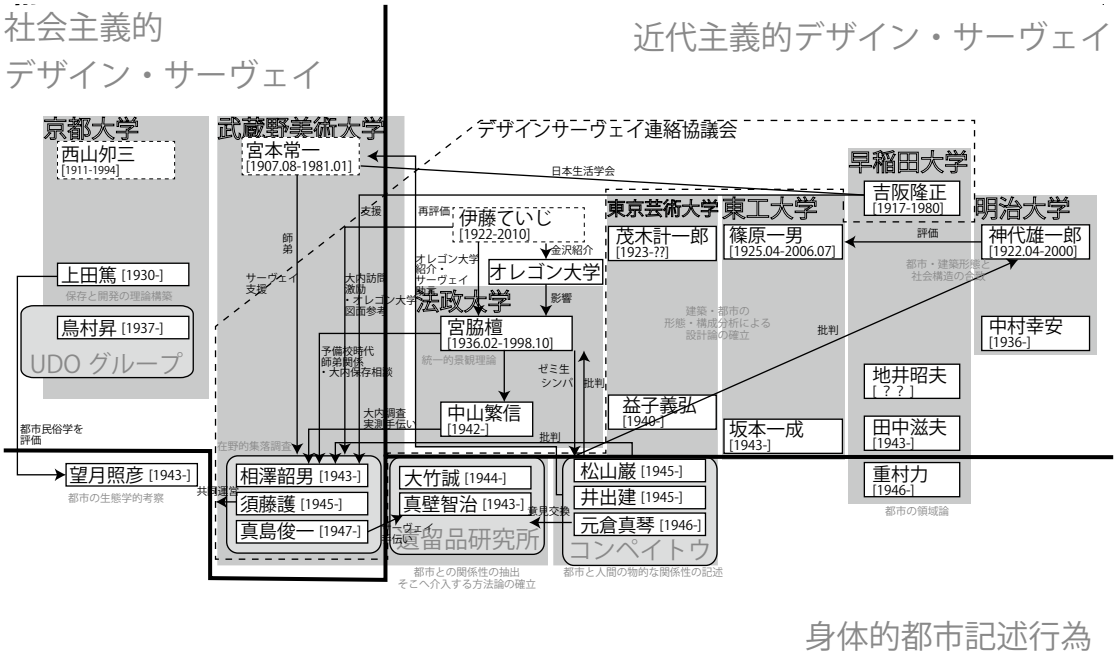

図２：調査主体の連関とデザイン・サーヴェイの特徴的傾向の抽出

を受け止めるフレキシブルな「生活のうつわ」としての都市空間を模索する。さらに京都の町並み保存の議論では、守らなければならないのはかわら屋根の街並みであると主張し、京都人の本質に物質文化のあらわれを捉えている。DS では京町家を対象とし、そこでのコミュニティのあり方や空間の使われ方などに着目する。

4-2　UDO グループ

UDO は、日本住宅公団の大阪支所のメンバーで構成される。都市生活環境の悪化に対し、単位住居の集合としての関連施設を含む居住空間の質追求、近隣関係と社会意識の形成、共同化のシステムにおける生活ルールの発見、守るべき歴史性、自然への希求などを問題として取り上げ、新しい生活環境、生活様式の創出への可能性を探ろうとしている。島村昇は、日本では低層高密居住に永い歴史を持っているとし、伝統的な庶民の都市住居として「町家」を説明する。DS での対象や取り組みは上田篤のものとほぼ同一である。

4-3　相沢嗣雄

相沢は、武蔵野美術大学の学生であり、宮脇檀の影響でデザインサーヴェイに向かう一人であるが、そこではデザインそのものには触れず、村の人々からの聞き取りと古文書から直接調べた村の歴史と現状を調査したものであった。このサーヴェイの支援を行ったという民俗学者の宮本常一民具学を築いたことで知られる。 宮本は外来的な文化・文明の圧力に対して、それを人間が生活の中でどう受け止めるかといった作業の中に伝統的なものを見出している。

第５章　身体的都市記述行為

これらのサーヴェイに見られるのは、都市と個人の関係性への意識、都市に存在する物的現象の観察、都市の表面の対象化、脈略のないものへの関心、都市の創発的構造の把握である。

5-1　コンペイトウ

コンペイトウは当時東京芸術大学の学生であった元倉真琴、松山巖、井出健らを中心としたグループである。松山は、日常の中で見落としてしまう木鉢や看板といった可変的なものは、常に変化することで、街を更新し、蘇らせるものあるゆえに語りかけてくると述べる。日常生活における創造行為（装飾）への参加には、「物を真に自分の所有物として全体を獲得」し、物とのかかわり合いを通して、都市との対話を試みようとした彼らの姿勢が伺える。

5-2　遺留品研究所

遺留品研究所は、武蔵野美術大学の学生であった真壁智治、大竹誠らを中心として活動したグループである。彼らは、街中に現れる看板やサインに着目し、その遺留品から発せられるメッセージを確認することで、都市現実への参加が可能になると考えた。真壁は、1970 年代は、「都市」が表現の対象であると同時に、批評の対象であったと述べる。都市を意味論的に解釈することで、そこに現れてくるモノへの再評価を測った。一方で、都市空間の構造的、現象的、意味的な読み替えを行うことで、一時的で瞬間的な集合体の形成の模索を試みた。

5-3　望月照彦

子供の頃の町での経験が地域の空間のイメージとともに記憶されていたのに対して、大学に入って地方から出てきて経験した出先空間と棲息空間のピストン運動のような都市生活の未開性が、望月を都市の探求へと向かった。団地の殺風景な中庭で、偶然出会う焼芋の屋台が、その都市空間を占拠しながら、団地の主婦や子供達が集まる場として機能しいたことに着目し、屋台を通して都市と暮らしの接続を模索した。

結章　結論

本論では、DS の多様性と共通性を、建築分野における戦後思想とパラレルな対立と断層、およびそれを促した戦後民主主義の倫理的な問いという視座から論じてきた。このような視座の提示と、それに沿って描き出された DS に至る歴史過程や DS の個別・全体の像が､本研究の特色であり成果である。その要点を以下にまとめる。

(1)(i)DS が民衆的環境から景観や社会の特質・論理を抽出しようとしたことは、民衆的伝統からの造形論に帰着した伝統論争（53-57）への批判というかたちで 50 年代的問題の更新であった、(ii) その 50 年代の論争において戦前派のマルキスト／リベラリストが表舞台から退場し、残った戦中派のマルキスト／リベラリストの問題系と、新しい戦後派の全共闘世代の問題系が、リアリズムの批判的再構築という DS の視線において同時的に噴出している

(2) 多様化されたデザイン・サーヴェイには、(i)「近代」と日本的表現の接続を目的とし、地方の集落や中世都市を対象としながら現代の都市・建築デザインと建築家の主体的に取り組むべき方向性の模索へ向かった【近代主義的デザイン・サーヴェイ】、(ii) 国民の生活に重きをおき（対象)、対外的な文化・文明に対して地域住民の文化を守るための保存・開発（主体性を持った取り組みとして）を模索し、西山夘三の社会主義的リアリズムや民俗学の物質文化研究の影響が見られる【社会主義的デザイン・サーヴェイ】、(iii) ユートピア的で抽象的な都市論に反発し、物的現象として都市像を捉え、都市を表現の場として主体的な参加を試みようとする【身体的都市記述行為】の三つの傾向が見られた。

(3)(i)【近代主義的デザイン・サーヴェイ】の主体には、「近代」的な思想による機能主義的空間評価が、古い建築を打倒し人間的な空間を達成すると信じていることが推察される。(ii)【社会主義的デザイン・サーヴェイ】には一貫して近代主義的なものに対する批判的な志向が推察された。より解像度を上げながら国民の文化に迫るため物的なものに注目する傾向が見られた。(iii)【身体的都市記述行為】をになった若い建築学生にとって国際主義・機能主義批判はセットされていた。その中で主体的に取り組むべき選択肢を自身の「体質」に求め、それを決定するために都市との対話に望んだ。

今後の課題として、戦中派の知識人に馴染みのある「日本浪漫」的文学や特に全学連世代の思想的背景にある美術や映画といった他分野からの影響を検証する余地があること、また全共闘と並行して起こる世界的な市民運動の背景とそうした言論の中にみる「環境」という語感についての理解が足りないこと、それぞれの立場におけるその後のデザイン・サーヴェイの限界性の解明が指摘できる。

■主な参考文献
- 濱口隆一『ヒューマニズムの建築』（雄鶏者、1947）
- 建築研究団体連絡会編『建築をみんなで』（日刊建材新聞社、1956）
- 川添登『現代建築を創るもの』（彰国社、1958）
- ミシェル・ラゴン『巨大なる過ち　現代の廃墟＝都市』吉阪隆正訳（紀伊国屋書店、1972 ／ Michel Ragon,LES ERREURS MONUMENTALES,1971）
- 布野修二『戦後建築論ノート』（相模選書、1981）
-「現代建築の軌跡」（『新建築』新建築社 1995.12）
- 小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、2002）
- 本多昭一『近代日本建築運動史』松井照光監修（ドメス出版、2003）